

教育目標: ○元気な子 ○やりとげる子 ◎考える子 ○思いやりのある子

めざす学校像: 保護者や地域から信頼される学校

めざす児童像: 子どもたちが主体的に学び活動する学校

めざす教師像: 教職員が協働して教育活動を創造していく学校

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	分析コメント	改善策
豊かに表現する力を育てる 教育の充実	考え、豊かに表現し、実践できる力の育成	情報を活用した主体的・協働的な学びの実現	○タブレットPCを使ったICTや、新聞、図書資料、既習事項を活用した授業改善を図り、情報活用能力の一層の伸長を図る。 ○図書館の活用、地域教材の開発や地域人材の活用を通して学ぶ楽しさと学び方を指導する。	4		3		○各教科の調べ学習で、図書館の本やタブレットを積極的に活用し、必要に応じて調べることができている。児童はさらに探究的な学習を求めている。保護者へは、ICT等の活用について十分な情報提供がなされていないことが分かった。 ○年間指導計画に基づき、地域人材を活用した学習に計画的に取り組むことができている。	○内容によって、児童自身が学びのツールを選択して学習を進めていけるようにしていく。 ○研修・実践を重ねて、効果的なICT機器活用を模索していく。 ○継続してしてきた取組を精査するとともに、新たな地域人材を活用することで、児童の学ぶ楽しさを高められるようにしていく。
		基礎学力の確実な定着	○東京ベーシックドリルを活用し、個に合わせて既習事項定着の徹底を図る。 ○習熟度別指導、算数補習教室等を実施し、個別最適な学びを充実する。 ○体力調査の考察を元に「一学級一取組」や、休み時間の外遊びの工夫や推奨を行う。	4		4		○3年生以上が学期末に東京ベーシック・ドリル診断テストを行った。(1学年前内容)結果を個票にし、児童と確認した上で家庭へ配布した。(平均得点率62.075%) ○休み時間に児童と一緒に遊ぶ教員が多い。	○個票を基に、児童自身が自分の苦手な内容を理解できるようにする。日常の授業を結び付け、意識して学習に取り組めるようにしていく。また、家庭とも連携し、既習事項定着の徹底を図る。 ○週1回程度クラス遊びの時間を設定するなど、推奨を引き続き行っていく。また、体力調査を分析し、児童の実態について、教職員で共通理解を図る。
保護者・地域と連携した学習や活動の充実	保護者・地域と連携し、国分寺市や地域を共に大切に育てる子どもの育成	学校の教育活動について保護者・地域に理解を得る。	○学校からの発信方法について、紙、メール、ブログのよさを組み合わせ、分かりやすく積極的な情報発信を行う。 ○保護者・地域からの情報や学校の課題を、コミュニティ・スクール協議会で検討し、内容を保護者・地域へ発信する。	3		4		○目的や内容に応じた効果的な発信方法の整理が十分ではない。 ○紙面の工夫は進んだが、まだ、配布物が多い。保護者にとって何が重要なかが判断できないことがあったのではないかと。 ○ブログのアップが昨年度よりも少なかった。	○学校からの情報発信手段について、意図的・計画的な運営ができるようにしていく。 ○重要な内容のものを配布する際には、他の配布はしないようにするなど、配布日を調整し、保護者にとって判断しやすいようにしていく。 ○ブログの運営を組織的に行えるようにしていく。
		の人材、教育材を生かした、郷土に根差す学習活動の開発	○コミュニティ・スクール協議会等の機能を生かし「国分寺学」を中心に、地域と連携を深める教育活動を継続・発展させる。 ○中学生ボランティア等一中学区で小中連携の取組を行う。 ○学校行事や学習活動で市制施行60周年に関連した取組を行う。	4		4		○「国分寺学」を研究のテーマに据え、全教員で取り組むことができた。また、全学年が1学期中に地域人材を活用した学習に取り組むことができた。 ○「国分寺学」について、児童・保護者に周知が必要である。 ○コミュニティ・スクールの機能について、教職員一人一人がさらに理解していく必要がある。 ○拡大コミュニティ・スクール等を設定し、教員と協議委員の話し合いの場を設けることができた。	○年度末「国分寺学」における取組について、成果と課題をまとめ、次年度の計画に盛り込めるようにする。これまでの取組について改めて価値を問い、これからの取組を決定していく。
豊かな心を育てる教育の充実	人権尊重の精神を育成し、豊かな心を育てる教育の充実	自尊感情の向上 自分や友達、一人一人を大切にできる子の育成	○理解教育や、スタートカリキュラムの理念を生かし、一人一人の多様性を認めた指導を行う。 ○学校教育全体を通して道徳教育に取り組む。	4		4		○せんだん学級の担任を中心に理解教育に取り組むことができた。また、これまで3年生までを対象にしていたが、高学年児童を対象にした理解教育にチャレンジすることができた。	○理解教育と同時に、日常から児童同士がお互いを認め合える活動を意図的に設けていく。 ○各教科の学習において、活動形態や発表の方法を、ICTや紙等、自分に合わせて選択できるようにしていく。
		学校や学級への帰属意識の高揚	○保護者・地域と連携し、学校・家庭・地域での適切な言葉遣いや挨拶のできる環境を整える。 ○縦割り班活動等の充実を図り、活動を通して異学年と交流を深め、他を思いやる気持ちを育てる。	4		4		○学校全体で挨拶のできる環境を整えてきた。コミュニティ・スクール協議委員や地域の方からも挨拶の良さを聞くことができた。 ○月に1回の縦割り班活動を生かして、定期的に異学年との交流を図ることができた。最高学年として6年生が非常に頑張りが、成長が見られた。	○挨拶ができるか、できないかを全体的な評価で留めることなく、一人一人のよさを認め、意欲を大切にしている指導の継続を目指す。 ○現状、縦割り班活動における6年生の負担が大きい。5年生の役割を明確にしていくなど、工夫していく。